5．遊びに関するレポート作成とこどもの生き方をかんがえる

―「こどもと環境」を通して―

宮　本　夏　子

1．講座の基盤

今年は戦後50年を迎えた。この50年の間に、日本は大きく変わった。6・3制度が始まり、列島改造論のもとに成し遂げられた高度経済成長と国民所得の向上、そしてここにきて経済優先政策からくる環境問題の再考を余儀なくされている。

これらの大人社会の陰で、こどもたちを取り巻く環境も変わった。1953年にはテレビ放送が始まり'59年には「少年マガジン」「少年サンデー」が発刊された。この頃から、高校進学率が高くなり受験戦争といわれる時代に入っていく。塾通いの子やカギっ子が増え、登校拒否児も出始めた。'83年にはファミコンが登場した。今や、こどもの多くは個室を持ち経済的にゆたかな生活をおくるようになった。しかし、この流れの中でこども達が失ったものも多い。交通事情の悪化などによる遊び場の減少、部活動や塾通いによる自由時間の減少、テレビやファミコンの普及により、家の中での遊びが増え、反比例するかのように屋外の遊びが消えた。ガキ大将がいなくなり、こどもの縦社会も消えた。

大人はこどもによかれと思って教育制度を考え、すべてのこどもに教育の機会を保証し、生活の向上に励んだ。こどもは、その社会を受け入れ、テレビやファミコンや塾などが存在する中で自分の生き方を模索している。

そこで私たちの講座では環境の変化がこどもの遊びをどのように変えてきたか、こどもが何を失ったかを調べることでこどもの生き方が考えられたら、と思った。こどもとおとなの狭間にいる中学生がこどもの環境はどうあるべきかをこどもの視点で考え、また複数の視点から発表しあい、1冊のレポート集にまとめることにした。その活動を通してこどもの在り方や、こどもを取り巻く環境の在り方をとらえ直してみたい。

2．学習活動の目標

学習活動の目標を次のように設定し、生徒は「松江市のこどもの環境」に絞って調査をすることにした。

「遊びに関する追及テーマを生徒それぞれの視点から調査・発表をし、それをグループでレポート作成をすれば、複数の視点から問題をとらえ直し、こどもの生き方を探ることになろう。」

3．レポート作成を支援する学習計画

生徒が自己学習能力を発揮できるようにと、研究部を中心に「総合学習ガイドブック」を作成し、生徒全員に配布した。内容は次の通りである。

表1「総合学習ガイドブック」の内容

(1)　総合学習とは
(2)　「総合学習」の進め方のポイント
(3)　活動計画表
(4)　活動の記録

第1時	ガイダンス
第2～3時	追及テーマの決定 本年度の活動内容
第4～5時	活動計画の立案と活動
第6～7時	活動と反省（自己評価）
課　外	夏休み中の活動
第8～10時	活動
第11～12時	発表準備a
第13～15時	発表準備b
第16～17時	講座内発表会（自己・相互評価） 総合学習の全体発表について
第18～19時	テーマ別発表会 平成7年度総合学習発表会自己評価表
第20～21時	レポートを作成しよう
第22時	学習の評価

以上のような流れで「総合学習ガイドブック」に学習の記録をとり、レポートを作ることにした。記録内容の中に大きく4つのねらいを入れた。

○ねらい1

計画を立て、実行し、反省し、次回の計画をたてるという行動様式を育てる。

○ねらい2

自分の研究したいあるいは調査したいことがらを絞りこみ、学習計画を立てる能力を育てる。

○ねらい3

自己評価・相互評価を取り入れたり、発表の場を作ったりしながら自己学習能力を高める。

○ねらい4

社会人としてのマナーを学ぶ機会を作り、電話のかけ方、依頼の仕方、こどばづかいについての技能も高める。

4．レポート作成までの学習活動の重点

(1) 教師は学習支援者

生徒は自分の調査を成功させるために、また、興味・関心が最後まで続くためにどんな条件を整えるのかを考える。生徒は資料を見つけだす方法や手段をグループで話し合い、身近な生きたデータをどんな方法で集めるとよいか相談する。教師は学習に対応する多くの場の紹介や提供を支援するとよい。教師がどんな学習の場が生徒にとって生きた教育の場となるかを吟味してやることが学習の良否を決めることになる。学習の場は、学校の中だけでなく図書館や駅や公園など無限に広がる。そこが生活とより近いところであればあるほど、勉強していることの意味が解り、生徒の興味や関心を持続させ、学習の意義を深めるものと考える。この学習活動では、教師は生徒に多くを教えないであくまでも支援者となり、生徒が悩みながらそして失敗をしながら１つのことを追及する姿勢を大切にしてゆきたい。同時に、教師もまた生徒と一緒に学習していく姿勢をみせることが大切であると考えた。

(2) ５Ｗ１Ｈで行動の計画

この学習は生徒の活動場所や内容が広範囲で多様になるため、生徒はそれに対応できるだけの細かい計画を立てるとよい。そのためには５Ｗ１Ｈで行動の計画を立てたり、準備するものを考えたりする習慣をつけていく。行動をおこす前に行動計画を立て、安全に学習する生徒になるように努めた。

(3) 学習をくりかえし行う

調査学習では、授業の大きなねらいからそれないように大切な事項の学習をくりかえし行うことである。生徒はともすると時間と場所を自由に選択できる場に自分を置くと、目的と違う興味や誘惑と隣り合わせのため、学習のねらいからそれた活動を始めるものである。生徒自身がしっかりと目的意識を持ち、自己の生き方について問い続けるためには、授業のねらいをとらえ、大切な事項の学習をくりかえし行うことが大切である。例えば、遊びと環境を大切にしたいと思ったら、こどもの情意や体の発達、そして運動能力の発達については基礎として押さえたり、社会の変化を調べたりするとよい。なぜ遊びが面白いか、なぜ遊びが大切なのかを何度も考える活動が学習方法の内容をより深いものにするであろう。

(4) 複眼的なものの見方を知る

同じようなねらいや追及テーマをもった者がグループの発表をしあったり、聞きあったりすることはとても大切である。この活動を通して、「こんな見方があったのか」「あの方法で調査したことに自分達のデータを加味するとおもしろい」など、複眼的なものの見方・考え方が芽生えてくる。

表２　生徒の追及テーマ

「こどもが遊べる松江の都市環境をめざして」

グループ	調べたい内容
活動１	いまのこどものファミコン使用時間の間の実態を探る。
活動２	テレビ視聴時間とテレビゲームで遊ぶ時間を調査する。
活動３	昔といまの遊びを比較する。
活動４	スポーツのとらえ方と遊びのとらえ方を探る。
活動５	幼児に与えられた園庭の広さと運動量とのちがいを比較する。
活動６	遊びについての親子の意見の違いを探る。
活動７	高度経済成長と情報化社会におけるこどもの遊びと環境を考える。

5．レポート作成の実際

(1) レポートの作成

実践した学習を記録に残し、今後の手引きにしたり学習の改善に役立つものにするため、各自でレポートを作成してお世話になった方に報告することにした。

表３　レポートの内容の例（すべての項目を書く必要はありません。自分で選んで書こう。ただし、ａ～ｃは必ず記入すること。）

① テーマ＆講座名
② 指導教官名
③ 実践者　学年　組　生徒番号　氏名
④ 講座選択の動機
⑤ 学習の計画
⑥ 学習の実際
⑦ 結果と考察（課題）
⑧ その他（提言など）
⑨ 学習を通しての感想
⑩ 資料など

形式
・Ｂ５版（縦）１枚以上
　上のａ～ｊの順番やレイアウトは自由ですが、他にアピールできるように工夫して下さい。
・用紙（４㎜方眼）

(2) レポートの形式

「レポートを作成しよう」の内容をうけて、私たちの講座でのレポートは次の３つの形式になった。

① 調査研究の論文形式にする
② 新聞形式にする
③ パンフレット形式にする

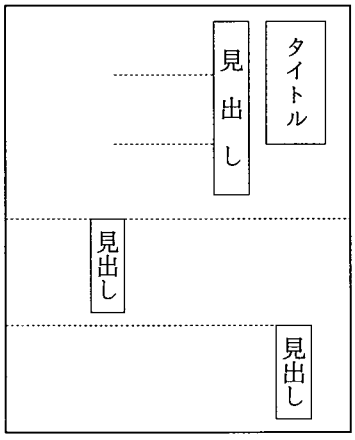
① 調査研究の論文形式にする場合

論文題目（中央にかく）
氏名

1 はじめに
2 目的
3 調査の項目
4 調査の計画（5W1H）
5 調査結果および考察
6 提言
7 参考文献や資料

② 新聞形式にする場合

- 多くの人に正確に知らせることを目的として「見出し」「リード」「本文」で構成をする。
- 「見出し」をどこに置くと効果的か、取材内容を生かすにはどんな編集にするかを考えて割り付けを行う。
- 絵、カット、表、グラフなどをいれると読みやすくなる。
- 新聞や雑誌の記事は引用したものを明記する。
- 人の嫌がる記事や下品なものは載せない。



書き方
縦・横自由
見出し
配置を考える（読みやすい配置がある）
遊び心
楽しく読める記事を作ろう

③ パンフレット形式にする

- 自由な発想でレイアウトしよう。
- 困ったら「レポートを作成しよう」のページを参照しよう。

6．資料提供の支援とレポート作成の視点

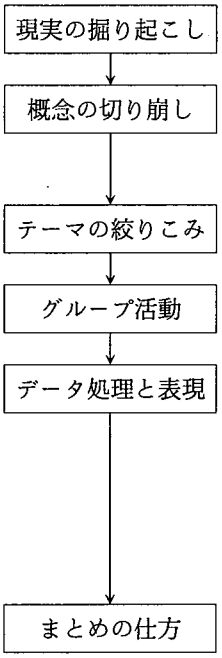
(1) 実際に行った資料提供

児童心理学・発達科学・運動学・生理学の本、遊びに関する新聞記事や写真、交通事故調査データ、市内各幼稚園・小学校・中学校でのアンケート実施、福祉施設・公共施設での聞き取り公園・ゲームセンターの調査など。

(2) レポート作成の視点と学習の実際

アンケートの分析・比較・聞き取り調査

「家の中や公園でのあそびが当たり前」のことと思っている。また、こどもは自分達の力では何もできないと考えている。これらの概念や諦観を切り崩していく。



幾つかのテーマを例として提示し、自分が追及したいものを選んだり考える。

グループで活動内容や方法の検討する。

内容を複眼的な見方で処理するため、グループ内でデータ処理を分担して作業を分担して作業を行う。

表現の仕方を話し合い、発表会に臨む。

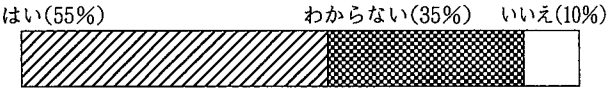
講座内の発表会で他のグループの活動や考察・提言を聞いて、自分達の生き方を問い直す。

レポートの提出。

7．学習の成果と課題

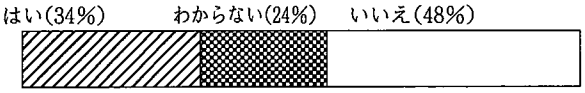
生徒はレポートのできばえについて次のように反省している。

(1) 人にアピールできるまとめができたか

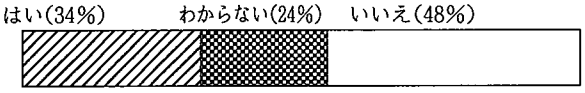


(2) まとめは自分だけでできたか

(3) まとめは楽しかったか



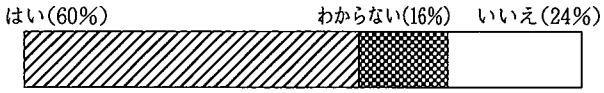
(4) まとめたことをお世話になった人にみてもらいたいか



(5) まとめ方をもっと教えてほしい

(6) 自分のまとめに満足しているか

(7)　自分なりの提言をまとめられたか



(2)の「まとめは自分だけでできたか」をみるとレポートのまとめは自分でしているが、できた作品に関しては自信のない者が多い。レポートのまとめが得意なものは満足をしているが、反面、そうでないものもほぼ同数いる。(7)の「自分なりの提言をまとめられたか」についてはほとんどのものが提言をまとめようと意識している。これは各自が問題意識をもって学習に取り組んでいた結果であろう。総じてレポート形式がよくまとまっていた。課題としては、(5)の「まとめ方をもっと教えてほしい」という声が多かった。実際、レポートのまとめに充る時間が2時間であった。もっと具体的にまとめの仕方やレポートを添削してやれる時間を確保してやれなければ、まとめの段階で不安になり、自信がもてないのが本当だろう。反省をしている。生徒は調査事項をすべて報告したがったり、不必要なデータを捨てたがらない。データの精選は難しいようである。学習の半ばに文部省の調査で、10月10日に10代の主な体力・運動能力の低下の記事がのった。特に、運動能力の低下の原因にテレビゲームの普及や、自由に遊ぶ環境が少ないこと、野球やサッカーブームで偏った運動ばかりしていることがあげられていた。生徒はテレビゲームの普及で体を動かさなくなったことが原因ではないかと仮定しても、それを実証するデータがなかなか見つからなくて困っていた。実態は把握しても、提言にまでもっていく橋渡しが見つからない時にこの新聞報道があった。この報道によって、こどもの在り方や、こどもを取り巻く環境の在り方をとらえ直してみることのできた生徒が何人かいた。私は以前から体育の教師として遊びの大切さを研究してきたが、今回は、生徒と一緒に人間の生き方や環境への関わり方を学習した。遊びを通して、人間の生き方の本質を見る目と本質を知ってこどもがこどもらしさを主張する授業にしたかったが力及ばず、現状把握にとどまってしまったことを残念に思っている。

ただ次の点はどの生徒も感じたレポートになった。戦後50年という時の流れの中で、こども達は確実に変わってきているという点だ。ここにきて大人は、よかれと思って与えてきた物がいくつか集まると必ずしも良い結果になるとは限らないことに気付いた。こどもたち自身が失ったものが多く、環境は二の次にしてなされてきた経済優先主義を再考しなければならないと。しかし、大人が声を大にして叫ぶよりもこども自身がこどもらしさを主張していない現実のつらさと難しさも話にでた。

20世紀が終わろうとしている今日、私たち人間は、動物としての環境を問い直す必要がありはしないだろうか。「わたしたちは地球に生かされている」という認識の中で文化を創造し、地球環境を考えていく時に来ていると思う。

参考文献

1)　武藤芳照（1988）「子どもの健康とたのしい運動」築地書簡株式会社。
2)　正木健雄（1981）『子どものからだⅠ』「からだをみつめる」大修館書店。
3)　読売新聞（1995.1.11）12版「消えた空き地の遊び声」。
4)　北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会（1994）「子どもと環境」東京書籍株式会社。
5)　第6回全国中学生ワープロ新聞コンクール入賞作品集より「ワープロ新聞のつくり方」。

（みやもと　なつこ・保健体育科／現在は島根町立野波小学校教頭）